



2020年（令和2年）
12月号（No. 907）

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

なぜか、私たちは駒ヶ岳マニア —ファンクラブ30周年に寄せて

田口計介

駒ヶ岳と呼ばれる山は、全国に30座あるという。「駒」の語源や駒ヶ岳という山名の由来、東日本に多いという分布の秘密、中国・韓国への調査行など、駒ヶ岳にまつわる興味深い話題を、1989年夏に初めて開かれた「全国駒ヶ岳サミット」のサポーターとして誕生した、「駒ヶ岳ファンクラブ」の田口会長に綴ってもらった。

駒ヶ岳は東日本だけ

2005年11月15日発刊の『新日本山岳誌』には、約3200座の山名の記載がある。これらの山のうち、私たち駒ヶ岳ファンクラブが「駒ヶ岳」と認定しているのは文献、古地図などの情報を含めての30座である。この30座のうち18座は、国土地理院の2万5000分の1の地形図に記載されている。

ちなみに駒ヶ岳の分布であるが、北は北海道駒ヶ岳、南は箱根駒ヶ岳、東は青森県の大駒ヶ岳、西は福井・滋賀県境の若狭駒ヶ岳である。この分布から分かるように駒ヶ岳は東日本にしかなく、大きな謎である。

平安時代の最高権力者、藤原道長の『御堂関白日記』（998〜1021年）に、この謎を解く鍵の

目次

なぜか、私たちは駒ヶ岳マニア —ファンクラブ30周年に寄せて……	1
追悼 山が己の分身だった中村純二さん……	4
ぐんま県境稜線トレイル単独行……	6
東九州支部創立60周年記念行事を催行……	8
今年も障がい者の皆さんと楽しんだ 大久保春美記念第10回ふれあい登山……	9
地域発「山の日」レポート③山梨県……	10
さんけん通信……	11
梶正彦会員に紺綬褒章が授与される……	12
東西南北……	13
支部だより……	14
福島支部／石川支部／福井支部 新入会員……	14
図書紹介……	17
図書受入報告……	17
会務報告……	18
ルーム日誌……	19
会員異動……	19
編集後記……	19

▶ 日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
★ 新型コロナウイルス感染防止対応のため、当分の間、取扱時間を短縮します。平日13時～20時

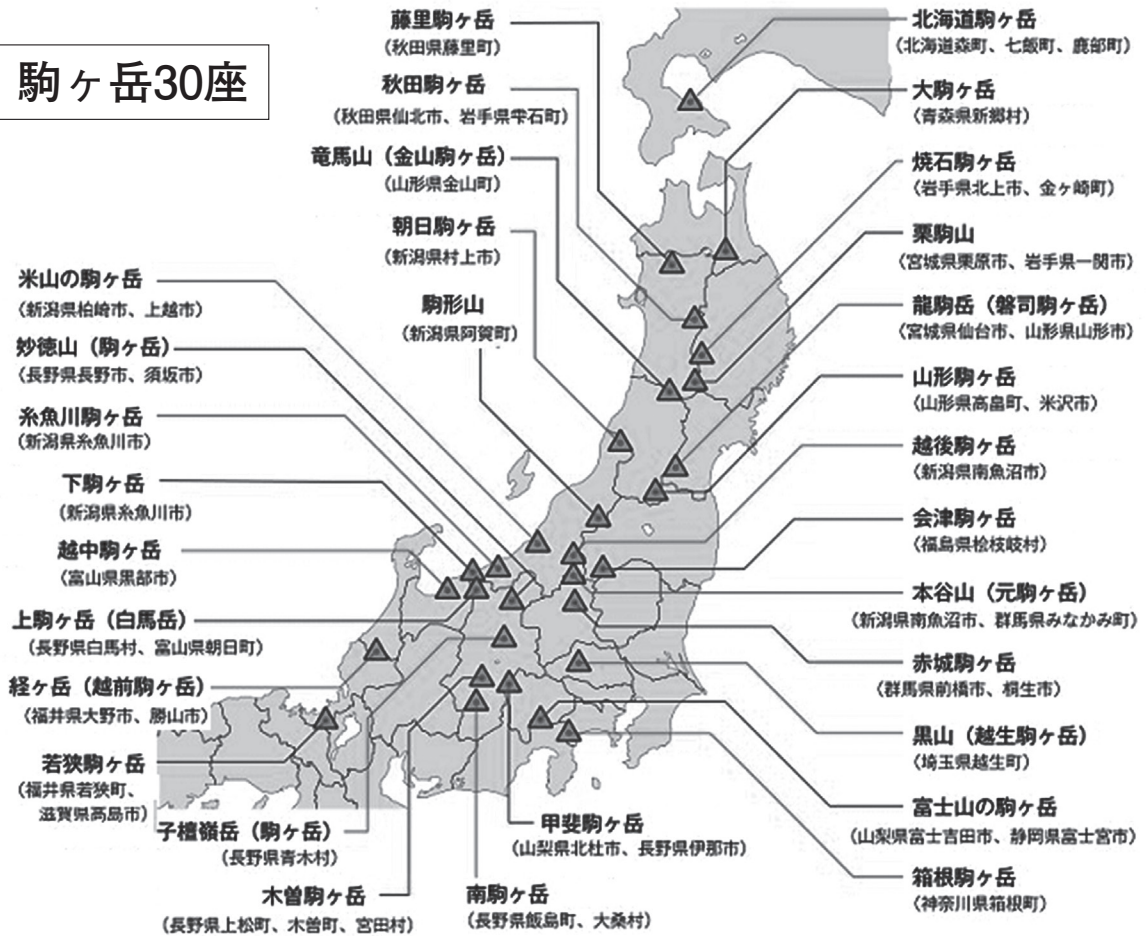
一つがある。道長は多くの受領や鎮守府將軍を任命したが、そのお返しにもらった牛馬についての記述である。道長に牛を贈ったのは西国の美作守、阿波守、備後守、越前守であり、馬を贈ったのは東国の上野守、駿河守、出羽守、武蔵守、常陸守であった。さらに江戸期の本草学者・医師・食物研究家の人見必大（1642〜1701）は、その著『本朝食鑑』で「西牛東馬」の様相を報告している。

東日本で馬が優勢なのは、中世を通じて東国の武士団が騎馬を重視していた。農耕では、発酵温度が牛に比べて6度高い馬の糞畜が温床に良く、低温の土壌には肥効が高いなど、寒冷地に適していた。

「駒」の語源

我が国での最古の史料は『日本書紀』（720年）であり、推古天皇20（612）年の項に「宇麻名羅麼、譬武伽能古摩」（馬ならば、日向の駒）とあるのが初出である。『和名類聚抄』（源順著、承平年間（931〜38年）成立）には「和名古万、無万。馬の子なり」とあり、漢

駒ヶ岳30座



字はともかく「こま」という名詞は大昔からあった。「角川古語辞典」には「上代ではほぼ馬と同義語であったが、平安時代以降はおもに歌語として用いた」とあるが、万葉学者の中西進氏は、その著『万葉の世界』で「駒」ということばは、万葉集では東歌のことばである。訛りのある、遅い東歌では駒といい、ふつう中央では馬という。中央に定着した東言葉、駒もやがて伝統化し、優美な雅語として馬を排除するに至った。」と説明している。

駒ヶ岳の名称の由来

この優美にして雅語を持つ駒ヶ岳の初見は、写本『宮根山縁起并序』(源行実編、建久2(1191)年)である。この縁起に「聖占仙人が駒嶽の山頂に権扉を排して神仙宮を営んだ。」

と記述している。また、伊那春近領・小出二吉郷の領主の小出能綱が、息子の宮熊に所領の一部を譲る「小出能綱の譲状」(工藤文書、建長3(1251)年)には「しはかきり、こまかたけ(木曾駒ヶ岳を指す)のとこまで」とある。

古絵図では、徳川幕府が大名に作製を指示した「正保の国絵図」(1644(48)年)で、各地の国絵図には(秋田)駒ヶ岳、駒ヶ岳(現・栗駒山)、(甲斐)駒ヶ岳、(木曾)駒ヶ岳の記載がある。

次に各地の駒ヶ岳の成り立ちであるが、30座は標高が異なるなど個々に個性があり、一様ではない。しかし、大雑把にまとめると名称の由来は、

①春先の雪の残る山肌に白や黒の馬の形、いわゆる雪形を現わす農事暦とした。②坂上田村麿など武將の愛馬にちなむ駒形神。③和歌山県・那智の熊野信仰など、地信仰と修験の結合。④朝鮮半島(主に高句麗)からの馬の渡来との関連。⑤馬の鬣、馬の背などを思わせる山容、などに分類できる。

駒ヶ岳の消長

日本山岳会の第3代会長の木暮

理太郎（1873～1944）が『山の憶い出』の本谷山（元駒ヶ岳）の項で「然し此地方の駒ヶ岳の名は餘に多くて紛わしい上に、村人さえ既に忘れてしまった名であるからして、」と記している。また、民俗学者の岩科小一郎（1907～98）は、駒ヶ岳を記述している神山弘著『ものがたり奥武蔵』の序文に「戦中戦後を通じての登山空白時代に、村の物知りといわれる老人はあらかた世を去つて、」と駒ヶ岳を含む山名の消失を嘆いている。

こんな事情で、未発見の駒ヶ岳の探し出しは大変難しくなっている。

駒ヶ岳ファンクラブの発足

1989年8月、各地の駒ヶ岳の山麓の23の市町村が長野県駒ヶ根市に集まり、駒ヶ岳友好連峰会議を発足させたのに伴い、駒ヶ岳ファンクラブはその協力団体、サポーターとして結成された。そのときの参加者は20名余りであった。そして、私たち駒ヶ岳ファンクラブの会員は「日本各地の駒ヶ岳の豊かな自然を愛し、駒ヶ岳山麓の人びとと交流し、その山麓文化に親しみむ」という「駒ヶ岳憲章」を定めた。

駒ヶ岳友好連峰会議とは「駒ヶ岳山麓の市町村が山岳の自然保護と資源活用を考え合い、駒ヶ岳を地域活性化のひとつのテーマとしていくために作られた会議」であったが、その役割を終えたとして2006年2月に解散した。

ファンクラブの活動

大方の登山団体は登山、文化の両面を有しているようだが、その比重は登山の方が重いようである。しかし、駒ヶ岳ファンクラブはその成り立ちの一つに「山麓の文化に親しみ」を掲げているように個々の駒ヶ岳の民俗などに親しみ、解明することも重視している。その主な個別のテーマの探求成果は、駒ヶ岳の代名詞的な雪形を調べた『全国駒・馬の雪形』、駒ヶ岳が歌い込まれた小学校、中学校の校歌を調べた『全国駒ヶ岳校歌集』、さらに駒ヶ岳神社、駒形神社など駒名の神社を調べて『全国の駒名の神社リスト』にしている。駒ヶ岳の総合的な調査の成果は『全国駒ヶ岳の歴史と民俗』、『駒ヶ岳とウマの百科』、『全国駒ヶ岳の民俗誌』そして『駒ヶ岳が描かれた絵図』などがある。

駒ヶ岳の標高が低い方では埼玉県の越生駒ヶ岳黒山、368・9m）、山形県の金山駒ヶ岳竜馬山、520・8m）、高い方は富士山頂の駒ヶ岳（3722m）、甲斐駒ヶ岳（2967m）とバラエティに富んでいて、これも駒ヶ岳の魅力の一つである。その駒ヶ岳を会員の登頂数に応じて、①5山こまぐさ賞、②10山こまぐさ賞、③15山駒ヶ岳賞、④16山駒ヶ岳大賞、⑤18山駒ヶ岳グランプリを毎年、年末に贈呈している。

外国にも駒ヶ岳があるのであるうか。漢字の故郷は中国、そこで駒の字が生まれた。その中国にも駒ヶ岳はありそうだが、野馬山脈（甘肅省）など馬名の山はあっても、駒名の山はない。同じ漢字圏の朝鮮半島、ベトナム、台湾でも駒名の山は探し出せていない。

駒ヶ岳ファンクラブは中国の甘肅省北蒙古自治県に3回（野馬山脈、2004～06年）、韓国に1回、駒ヶ岳を求めて調査団を派遣した。野馬山脈は祈連山脈の支脈で、東は昌馬、西は党河まで約200kmに及ぶ。第1回、第2回の調査は野馬山脈の主峰、通称野馬峰を指した。今日ではGPSで正確な

標高を測れようが、当時は地図も不正確で、持参の高度計で計測を行ない、野馬峰の標高を5000m弱とした。ベースキャンプはドロノール（鏡湖、3850m）であり、私たちがドロノール駒ヶ岳と命名した野馬峰に登頂した。

隊員の一人は、この登山を「山頂からの眺望は、駒ヶ岳の名にふさわしく、とにかくスケールが大きく、遠く雪を戴いた大雪山（5483m）や祈連山脈を始め、赤茶けた山々が360度に亘って見渡せ、氷河や雪解け水による浸食の跡が一目で分かる創成期の地球の様を



木曾駒ヶ岳の雪形。伊那側に盆踊り娘、島田娘、黒馬などが現われる（5月8日の撮影）



中国・野馬山脈のドロノール駒ヶ岳に登頂した調査団

観察できるパノラマであった。」と記した。

そして、第3回の調査は大馬鬣(鬣)山(2583m)に絞り、登頂した。この3回の調査は毎回、遊牧騎馬民族の末裔モンゴル族のお世話を受け、非常に有意義なミッションであった。

韓国へは2009年に調査に出掛けた。全羅北道の双耳峰の馬耳山(マジサン、東峯673m、西峯667m)と江原道の雪岳山(ソラクサン)国立公園内の馬等嶺(1327m)の2ヶ所である。馬等嶺は、最高峰の大青峰(1708m)への登山道の中ごろにあるピークの一つである。

なぜ駒ヶ岳なのか

駒ヶ岳ファンクラブ会員は、なぜ駒ヶ岳に惹かれるのであろうか。発足時の会員は20名余り、最盛時には140名を数えたが、昨今は高齢化の波をモロにかぶり50名余りとなった。その会員の中に、少数ではあるが全く駒ヶ岳に登らない、登山をしない会員もいる、しかし、駒ヶ岳が大好きである。

駒ヶ岳の文字のイメージと志向は、①甲斐駒、木曽駒、越後駒、頸城(糸魚川)駒など昔の国の香りがすること、各々すばらしい魅力ある岩壁を持つている。②野趣がある。③ロマンがある。④馬が大好きである。⑤昔使われていた農事暦に興味を持つ、などがあるようだ。

しかし、駒ヶ岳ファンクラブの全会員は、こんな理由を挙げるまでもなく、基本は「駒ヶ岳遊び」を楽しんでいる。ある会員の山行報告の1フレーズに「三好神社の神様はお酒が大好きなので、お酒だけは無尽蔵に荷揚げされています。」とあったが、これこそ究極の遊び心であろう。

(駒ヶ岳ファンクラブ会長)

追

OBITUARY

悼

山が己の分身だった 中村純二さん

日江井榮二郎

中村さんは自然界に対して純粋な澄んだ眼で、真摯に眺められていた。旧制第一高等学校

旅行部の縦の会誌に寄稿された「静かな山々と先輩」に、「山に出かける場合私はその自然が損なわれていず、また人に煩わされないことをなによりも望むものであるが、同時に様々な人とのつながりも亦大切であるとおもう」と書かれている。

東京大学ではスキー山岳部に入られ、昭和50(1975)年、同部の部長をされた。現役のときには、北海道から九州まで全国の山々を歩き回った。大

学を停年退職後は30年間、ほぼ毎年3ヶ月間、ご令室とヨーロッパの山岳地方の旅をされていた。モン・ブラン(4807m)、ピレネー山脈のアネト(3404m)、ドイツのツークシュピッツェ(29



南極・昭和基地で樺太犬のタロ・ジロとともに



中村純二(なかむら・じゅんじ)

会員番号4541

- 1923年 9月 滋賀県近江八幡市に誕生
 1941年 4月 第一高等学校理科入学、旅行部入部
 1944年10月 東京帝国大学理学部物理学科入学、スキー山岳部入部
 1947年10月 卒業後、東京大学教養学部助手
 1956～58年 第1～3次南極地域観測隊に参加
 1957年 7月 日本山岳会入会、紹介者は平山善吉元会長
 1967年 6月 東京大学アラスカ学術登山隊隊長
 1975年12月 東京大学スキー山岳部部長
 1984年 3月 東京天文台併任、東京大学助教授、教授を経て停年退官、名誉教授
 1984年 6月 東京大学スキー山岳部カラコルム学術登山隊総隊長
 1993～96年 日本山岳会の理事や評議員を歴任したのち副会長に
 2008年 同名誉会員に推挙される
 2020年10月21日 逝去、享年97

63m)、スコットランドのベン・ネヴィス(1344m)を登頂、ドロマイトのドライチンネの周回、サンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼路などを歩かれ、東欧スロヴァキアのロムニスキ・ステイトまで足を延ばされた。

平成20(2008)年ごろ、岩尾根で2mぐらいの段差のある所を飛び降りそくなって転び、脳震盪を起こした。そのときは奥様が荷物を持って夜遅く無人小屋までたどり着き、翌日も苦労して山麓に戻り、「もう山旅は続けられない」と思って山の荷物をすべて日本に送り返した。しかしその後、都会の病院で診てもらったところ、骨に異常がないと言われ、痛み止めをもらっただけだった。中村さんは大喜び。「まだ歩ける」と言って山道具を現地で買いそろえて山旅

を続けたほど、若き日の夢を奥様とご一緒に充実した生涯を全うされた。

妖しく輝くオーロラを研究対象にされたのも中村さんらしい。昭和31(1956)年に始まった南極地域観測事業では第1～3次観測隊として参加し、オーロラや夜天光の観測を行ない、その成果は天文学会誌に発表された。

1956年12月5日、インド洋を航行中の南極観測船・宗谷に乗船中、鳳凰座流星群に遭遇し、「熱帯の夜の競演 天球狭しと流星の乱舞」と題して南極新聞にその様子を書かれた。これは、行方不明のブランペイン彗星を再発見するきっかけとなった。

ご夫妻は平成26(2014)年12月2日、天文学者と一緒にカナリア島にて鳳凰座流星群を58年ぶり

に再確認された。これはNHKの「ゴズミックフロント」で放映された。さらに南極第2次越冬隊で行

かれたとき、接岸できないので断腸の思いで樺太犬を昭和基地に置いてきた。そして、第3次越冬隊で行かれたとき、中村さんはタロ・ジロに1年ぶりで再会した。犬も中村さんも感動されたことだろう。

昭和42(1967)年には、アラスカ・ヘス峰(3639m)登頂と学術調査の隊長をされ、また、昭和59(1984)年にはパキスタンの未踏峰、6934mのK7の全員初登頂を完遂されたときの総隊長兼学術隊員をされた。このとき水河・気象の調査を奥様と行な

た。中村さんは登山活動だけではなく、学術調査活動もされている。地球の環境を守りたいというお気持

ちの表われと思う。昭和32(1957)年、日本山岳会に入られ同会の評議員や理事、副会長を歴任された。科学委員会では学者としての知見を述べられ、青森支部会員が推進していた白神山地の自然を守る運動も応援された。日本山岳文化学会でも、多くの人に先生の山や文明・文化に対する考えを伝えられた。

中村さんは、山は己の分身であると思い、禅語「山色豈非清浄身」を体得された人であった。

(東大山の会会員、東京大学・国立天文台・明星大学名誉教授)

令和2年度(後期) 海外登山助成金について

新型コロナウイルス感染症の世界的感染拡大に鑑みて、日本山岳会の海外登山助成金の後期募集については、締切日を設定いたしません。

海外登山の助成金申請をお考えの方は、個別に事務局にお問い合わせください。ただし、今後の状況によっては募集の中断、助成結果の取り消しをする場合もあります。

海外登山助成委員会／日本山岳会事務局 (問合せ窓口) ☒ jimukyoku@jac.or.jp

REPORT

ぐんま県境稜線トレイル単独行

千葉支部 密本織絵

今年、千葉支部の会友として入会しました密本です。小さいころは、ハイキングなどに連れて行ってもらっていましたが、自分から山に行くようになったのは5年前くらいで、それからハマってしまい、千葉の低山も含め、ほぼ毎週のように山に入っています。山を始めたころは知人に連れて行ってもらうことがほとんどでしたが、山をもっと勉強したいと思って独りで参加した雪山教室で、南アルプスを全山縦走した女性と出会ったことがきっかけで、ロングトレイルに興味を持つようになり、長い距離を歩くようになりました。

【COM】

定時で帰宅後、すぐに準備を済ませて新幹線で上田駅に向かい、23時ごろに駅前のホテルに到着。

【TIM】

上田駅前に4時に予約していたタクシーに乗り込み、鳥居峠へ向かう。運転手さんも山登りをしていいることもあってか、着いてからも真っ暗な中で準備ができるまで明かりをつけて待っていてくれて、運転手さんに感謝。

今回の「ぐんま県境稜線トレイル」は、好きで何回も行っている谷川岳が含まれていたこともあって開通当初から気になっていましたが、たまたま9月に6連休が取れることになり、8月半ばごろから計画を練り始めました。本来なら誰かほかの人と一緒にいった方が安全だとは思いますが、独りで行くことで自分自身の判断基準や

山での行動を知ることができたり、スキルアップにもつながるので、独りで歩くことにしました。

*

四阿山頂手前の孀恋清水で水を補給、キンキンに冷えた水が美味しくて身体が目覚める。期待していた山頂からの景色は雲の中で、諦めて先を急ぐも、浦倉山の分岐では間違えて孀恋の方に降りてしまい、40分のロス。幸い土鍋山までの道は笹刈りが行なわれており、予定より早く毛無峠に到着。ここから万座温泉まで約10kmの

舗装路で、足の裏と肩が痛くなりスピード上がらない。休み休み歩いていたら、四阿山から下つているときにすれ違った方が車で通り掛かり、「万座温泉まで送ろうか」と声を掛けてくれたのだが、断ったところ、「谷川岳まで歩くって言つてたから、断ると思つてた。」とのこと。その気遣いがすごくありがたくて嬉しかった。声を掛けてもらえたお陰で元気が出て、なんと17時に湯の花旅館に到着。

【COM】

4時30分、旅館を出発。宿の方から「熊が出るよ」と聞いていたので、ザックの胸の部分に付けた鈴と、コッヘルをストックで打ち鳴らしながら進む。ガスに包まれた国道に出ると、芳ヶ平の方から太陽の光が差し込んできて明るくなるも、横手山に着くころには再びガスの中へ。期待していたパン屋さんもまだ開いておらず、諦めて進むことに。

赤石山から大高山までは笹ヤブがひどく、足元が全く見えない中、肩近くある笹をストックでかき分け、足の裏で踏み跡を探しながら進む。だんだん予定時刻より遅れが出てきて、休む間もなく歩を進



避難小屋が新築され、周辺が整備されているムジナ平

める。大高山からは笹がきれいに刈られていて歩きやすく、整備のありがたさを改めて感じる。

2日連続でギリギリの17時に野反湖キャンプ場に到着。道中誰とも出会わず、独りで永遠に続くかと思うようなヤブ漕ぎが続いたのもあり、6日間でのこの区間がいちばん辛かった。

【COM】

この日は時間に余裕があつたので、ゆつくり6時に出発。良く整備された登山道に感謝し、歩みを進める。稜線に出ると新渴側は真っ白な状態だったが、ムジナ平に近付くにつれ雲の切れ間から太陽の光が差し込み、熊笹が光つてい



谷川連峰を踏破、朝日岳の稜線に行く。ゴールは近い

るように見え、神々しく感じる。

ムジナ平の避難小屋はまだ新しいこともありきれいで、小屋の周辺も草が刈られて庭のようになっていた。ザックを置いて水場までは往復30分、笹をうまく使つて水を集めて汲み取る。この日は天気があまり良くなかったためか、避難小屋は自分独りだったので、ゆったりと使わせてもらった。

【40mm】

5時前に避難小屋を出発。三坂峠までは笹刈りがされていたが、刈られた笹が朝露で濡れていてよく滑り、何度か尻もちをつくハメに。そこから三国峠までは笹が増えたが、それよりも熊か鹿か、獣

の気配が3回ほどあり、かなり近くで音を立てていたので鈴を鳴らし、声を出し慎重に進む。三国峠まで来ると、ほかの登山者とすれ違うようになり安心する。三国山からは気持ちの良い稜線で、久々にきれいな青空がお目見えし、靴を脱いで濡れた靴下を乾かす。

平標山の家ではテント場が混んでいたの、避難小屋の方に泊まらせてもらう。夜、要救助者が運び込まれて来たが、命に別状はなくひと安心。明日自分が歩く場所なので、気が引き締まる思いに。

【50mm】

朝起きると風が強くて、薄手のフリースに雨具を着て出発。平標山、仙ノ倉山までは風だけだったが、次第に雨混じりになり、避難小屋をハシゴしながら休憩し、身体を冷やさないように進む。ありがたことに、知人が最後の谷川連峰区間を一緒に歩いてくれるというので、オジカ沢避難小屋で待つていてくれた。

肩の小屋に着くころには雨もやみ、ガスも取れてきて下の町が見える。何度も見た景色で、「帰って来たよ。たいたい」と思わず涙が溢れる。茂倉避難小屋では、知人が

持って来てくれた久々の肉や果物を堪能し就寝。

【60mm】

真夜中ごろから風が強くなり、テントが飛ぶんじやないかと思つてしまふくらい。朝になつても風はやまず、このまま出発して良いものか悩んだが、淡々と準備する知人に勇気付けられて、ガスの中を出発することに。

蓬峠近くになるとガスの中から抜けたのか、青空が白毛門の方までしっかりと見えて、「最終日、お疲れさま」と言ってくれているような気がして、また思わず涙が溢れてきた。白毛門からの長い下りも、まだ下りたくない、もつと歩き続けたい、といった感情が込み上げてきて、思わず足の進みが遅くなる。それでも17時過ぎに土合橋を渡り、ゴール。

＊

トレイル全体の印象としては、良く整備はされているが一部の区間で道が安定しておらず、ヤブ漕ぎや長い舗装路歩きがあり、宿となる場所が限られているので、小屋が点在している山域に比べて、難易度は高いように感じました。

今回、このトレイルを歩くに当

たり、応援してくれた方、サポートしてくれた方、途中で声を掛けてくれた方、本当にありがとうございました。次は天気の良い日を狙って歩きたいと思いました。

【日程・行程】

■日程（天候）…9月17日～22日（17～20日：曇一時晴れ／21日：曇ときどき小雨／22日：曇のち晴れ）

■行程…◆17日4：40鳥居峠↓8：40四阿山↓14：00毛無峠↓16：50万座温泉湯の花旅館

◆18日4：30出発↓6：50横手山↓10：20赤石山↓14：20大高山↓16：10三壁山↓17：00野反湖キヤンプ場

◆19日6：00出発↓10：30白砂山↓14：45ムジナ平避難小屋

◆20日4：50出発↓8：10稲包山↓12：05三国山↓14：40平標山の

家

◆21日5：10出発↓6：50仙ノ倉山↓9：40万太郎山↓13：20谷川

岳肩の小屋↓15：25一ノ倉岳↓16：10茂倉岳避難小屋

◆22日5：20出発↓7：45蓬峠↓12：15朝日岳↓14：30白毛門↓17：15土合橋

（千葉支部会友）

REPORT

東九州支部創立60周年記念行事を催行

東九州支部 飯田勝之

東九州支部は去る11月21～22日

に、創立60周年の記念行事を実施した。当支部が本年度に創立60周年を迎えるに当たり、①記念式典・記念講演会、記念祝賀会の実施、②県内山行、国内山行、海外山行など記念山行の実施、③記念誌の発行 ④『大分百山』の三訂版の発行などを計画して、令和元年度からその準備を開始してきたところであつた。

しかし、本年春先からのコロナ禍の中でその実施については、状況を見ながら計画を二転三転させなければならぬ事態となつた。そして、年度末まで待つても事態の好転は見込めない状況の中で、①記念式典および記念講演会のみ行ない、祝賀会は中止。②全国各支部に案内して交流・親睦を図ることも中止して、支部会員(会員・準会員・会友) だけによる内輪の行事とする。③記念山行は県内山行のみ実施。④記念誌と『大分百山』の三訂版の発行は、予定どおり実施することとした。

記念式典と講演会

11月21日(土)午後2時から、記念式典と講演会を開催。場所は大分市のホルトホール・小ホール。受付で体温チェック、全員マスク着用、座席は定員212名のホールの椅子を1つ置きに使用、会員56名、準会員4名、会友41名の101名が出席した。特別招待の北九州、福岡、宮崎の九州の3支部長も出席。

受付では記念品のジャケットと併せて、記念誌と出版したばかりの『新大分百山』(『大分百山』三訂版)も配布した。式典ではまず10年間の物故会員への黙祷や加藤支部長の挨拶、永年会員の表彰があり、来賓の古野淳・日本山岳会会長、吉野真治・大分県山岳連盟会長、それに毎年、支部の主要行事ごとに参加くださっている重廣恒夫・前日本山岳会副会長の三方から祝辞をいただいた。

その後は記念講演会となり、講師の古野淳会長より「エベレスト50」と題して約1時間、1953年

のイギリス隊初登頂と、それ以降のヒマラヤ登山の歴史や、古野氏が参加した1995年の日本大学エベレスト登山隊(北東稜より初登攀)など、高所登山の豊富な経験から様々な話題が語られた。

その後はビデオ放映で、1965年に東九州支部(当時は大分支部)が初の本格的海外遠征登山隊として、ヒンズー・クシユのコー・イ・モンディ(6248m)に登頂したときのフィルムをドキュメントとして編集したDVDの放映があり、支部の先人たちの映像を懐かしんだ。そして、出席者の記念写真を撮影し午後5時15分、記念式典の幕を閉じた。

記念山行は鎧ヶ岳

翌22日(日)は記念山行で、当初は各支部からの参加者を念頭に置いて由布岳を予定していたが、3連休で登山口の駐車場や登山道の混雑が予想されるなか、支部会員だけの1つである鎧ヶ岳をバリエーション・ルートで登り、ノーマル・ルートで下山した。

登山口の四辻峠に午前9時、車30台余り、69名の参加者が集合し



登山口の四辻峠に集合した記念山行参加者たち

た。記念式典に出席した古野会長もこの山行に参加。晴れのち所により雨の天気予報の下、9時15分出発。最初は約1・8kmの車道歩きで、その後、溪流に沿って踏み跡道を登る。いったん林道に出た後、主稜線に登って鎧ヶ岳、烏帽子岳、雨乞岳と縦走、途中で昼食をとって、午後1時過ぎ全員、四辻峠に下山した。心配していた空模様はまだ少し青空も残っていた。支部長や古野会長の挨拶で解散式。かくして60年の節目の年は、新型コロナウイルスとともに支部の歴史に残ることとなる。

(東九州支部事務局長)

REPORT

今年も障がい者の皆さんと楽しんだ 大久保春美記念第10回ふれあい登山

埼玉支部副支部長 高橋 努

不思議なもので、障がいのある皆さんと山を歩くと山の景色がちょっと変わる。桜はひととき華やかに、緑はさらにみずみずしく、吹き抜ける風は心を運ぶようだ。なぜだろう。

「はるみん」を胸に

大久保春美さん（日本山岳会元副会長・故人）のキャラクター・マスコット「はるみん」が描かれたネームプレートを胸に皆さんの足取りは軽く、実に楽しそうに、のびやかに歩いている。元氣いっぱいの子がお母さんの手をぐいぐい引っ張って先を行こうとする。その後ろを足の悪い年配の方が「ゆっくり、ゆっくり」と自分に言い聞かせるように、慎重に歩いている。目の不自由な方は日差しを顔にこぼれたいように、空を仰いでニコニコしている。そして、見守り役の私たちは心地よくのんびりと歩く。周囲に目をやると、埼玉県郊外にも紅葉の色付きがゆっ

くりと訪れて、足元はドングリを散りばめたようだ。こんな日は、誰でも上機嫌で気持ちも高揚する。散策をする地元の方がにこやかに手を振ってくれる。

今回のコースは急な登降もほとんどなく、時間も余裕たっぷりなので、ランチ休憩は1時間もとれた。あさひ山山頂の広い草原いっぱいには広がつて、思い思いにお弁当を楽しむ。そこになんと、地元に住んでいる障がい者施設の方からお餅の差し入れだ。一斉に歓声が上がる。このイベントは支部の社会貢献委員会が担当だが、安全確保以外には気を遣うことは何もない。ごく自然体でそこかしこにふれあいの輪が広がるのだ（11月8日、飯能駅―あさひ山展望公園―飯能駅のコースで実施）。

埼玉支部は今年が設立10周年

このイベントに関しては、会報2019年5月号で報告させていただいたが、埼玉支部のふれあい

登山は今年で10回目を迎えた。例年どおり4月の桜花爛漫の下での開催を計画していたが、残念ながら中止のやむなきに至った。取りあえず11月に延期して様子を見ていたが、コロナ禍は終息せず、さて、どうするかという事態に至った。障がい者のスポーツ大会が軒並み中止になるなか、主催者である埼玉県障害者スポーツ協会も大いに迷われたものと思う。

そこで山岳団体などから発信された指針に従い、コースをレベルダウンする。集合写真や昼食休憩などでの3密状態を回避できる計画とする。体調チェック、検温消毒などとは徹底的に対応する等々を

提案し、実施に至った。対策としてグループ間の距離も開けるようにしたため、はぐれてしまったグループもあつたが、参加の皆さんは協力的で特に不満もなかった。解散時の皆さんの屈託ない笑顔が「楽しかったあ」と語っていた。

埼玉支部は、今年が設立10周年だった。昨年からの腕によりを掛けて準備した祝賀会も記念山行も、残念ながら実施できなかった。9月からようやく山行を開始したが、これからもウィズコロナ禍に適合した活動を進めていかなければならない。細心の注意を払って、粘り強くチャレンジしていくことになるう。



気持ちの良い森の散策路を歩く一行



あさひ山山頂広場でのんびりランチを楽しむ

地域発「山の目」レポート③山梨県

新しい山の楽しみを夢見て

小林千穂

山梨での生活を始めて5年。富士山や南アルプス、八ヶ岳、奥秩父の山など、日本を代表する名山に囲まれ、山ライフを満喫中……。と言いたいところだが、実は昨年末から本格的な登山は休んでいる。今年の夏前に子どもが生まれ、目下、子育てに奮闘中。山へ出掛けるのが難しい状況なのだ。

それまではプライベートはもちろん、取材やそのほかの仕事、ときにはガイドとして、年に100日を超える山行をし、まさに山から山へ飛び回るような生活だった。

もし突然、好きな山登りができなくなってしまうたら、どんなに苦しいだろうかとよく想像していた。しかし、実際にそのようになってみれば、「眺めて楽しむ」山との関わりも、案外悪くない。靄をまとった穏やかな朝の山並みや、快晴の日中にくっきりとした稜線を見上げたり、散歩をしながら夕焼けに赤く染まる姿を見たりと、日常の生活をしながらも山々が望める山梨にいるからかもしれない。

今は山との距離があるが、考えてみれば、これまでも山との関わり方は様々だった。私の本格的な山登りのスタートは小学3年のとき、山好きの父に連れられて家族で登った富士山。それから毎年、南・北アルプスなどの山に登りながら成長をした。学生時代に、山好きが高じて槍ヶ岳山荘でアルバイトをしたのをきっかけに、社会人になってからは涸沢ヒュッテの従業員として働いた。その後、カメラマンのアシスタントとして、重い望遠レンズや予備のカメラを持ち、北アルプスの山々をがむしやらに歩いたこともあった。

編集の仕事を始め、その仕事にも少し慣れてきた30歳代前半は、野山に咲く花や温泉を楽しむ、女子らしい山歩きを楽しんでいた。でも、どこか物足りないものがあったのだらうか、数年後に山岳会に入会したのをきっかけに、クライミングや雪山、海外の高峰への挑戦に没頭するようになる。新しい山の世界を知り、これまでに

なかったスリルや高揚感を味わって「自分の求めていた山登りはこれだ」と、仕事をしつつも山三昧の日々を送った。

しかし、結婚をして家庭ができると、次第にリスクの高い山への情熱は冷め、代わりにテント山行でゆつくりと山に滞在したり、歴史や地質、植物などの自然観察に重点を置く山登りが楽しいと感じるようになった。こうして振り返ってみると、そのときどきの生活スタイルの変化によって、山との向き合い方も大きく変わっている。趣向は変わっても、いろいろな楽しみ方で迎えてくれる山は、生涯を通じて楽しめる趣味なのだと、近ごろ改めて感じている。

さて、私の結婚が決まったとき、父が話してくれたことがある。それは、私が子どものころに家族で登った山のこと。父は自分の好きな山登りを、いちばん身近な存在である家族と一緒に楽しみ、感動的な光景を共有したかったのだそう。だ。「小さいころ、ときには無理矢理山へ連れて行って、キツイ思いをさせたかもしれない。だけど、皆がそれに付き合ってくれて、これ以上うれしいことはなかった」



子どもを連れて少しずつ近くの山へ。御坂山塊・四尾連湖にて

と、一緒に登ったこれまでの山を振り返りながら話してくれた。

今、子どもを胸に抱きつつ、近くの山を見上げ、新しい家族と山を歩いたらどんなに楽しいだろうかと想像している。初めはおんぶをしてこの山。歩けるようになってから、いちばん最初はあの山。いつかは、あそこからの景色と一緒に見られるだろうか、などと考えるのは夢をふくらませている。父が私にそうしてくれたように、日本の山のすばらしさを、そして、山登りの楽しさを、私もまた伝えられたらいいな、と思っている。

（山岳ライター・山の日アンバサダー）

さんけん通信

山研の開所・閉所はサポーターに感謝

山田和人

早いもので、今年5月に私が山研管理人に就任して半年以上が過ぎました。11月8日に上高地から下山して、今は妙高高原で生活しています。この原稿が皆様のもとに届くころには、こちらは山も建物も道路も全てが白色の景色となりますが、今はスキー場の草地が茶色の肌を見せています。

今回の「さんけん通信」では、現在の上高地の様子をお伝えすることができないため、山研の開所・閉所について、その様子をご紹介しますと思います。

今年はCOVID-19感染拡大のために通常の時期に開所がで



開所作業は雪囲いの取り外しから

ませんでしたが、本来であれば4月27日に執り行なわれる上高地開山祭に合わせて・ゴールデンウィーク前に開所作業が行なわれます。山岳研究所運営委員会（山研委員会）および信濃支部のメンバー、そして、神奈川工科大学の学生が集まり、雪囲いの取り外しと収納、バルコニーに凍結付着した雪の除去、建物の配水管バルブの操作とポンプ始動による上下水・汚水の通水、内部の清掃、1階フロアのワックス塗布などの作業を実施します。併せて建物に不具合箇所が生じていないかのチェックも。さらにミニ水力発電を稼働するために、善



雪囲いで封鎖された玄関とバルコニー

六沢水源地の整備、雪中からのパイプの掘り起こしとパイプ接続、発電小屋内の発電機準備、そして試運転・通電。これらの作業のため10〜15人の人手が必要となり、通常は1泊して、夜は懇親を兼ねた宴会をしながら、そのシーズンの山研運営についての方針などを話し合います。

今年は大人数が集合することを避けて、6月上旬に3〜4人の山研委員が数日に分散して雪囲いを取り外し、通水、ワックス塗布の作業を実施しましたが、ミニ水力発電の稼働は断念しました。その後は7月15日のオープンまでの時間を使い、管理人の方で建物点検、備品・寝具の整備（主にCOVID-19対応）、家電の入れ替えなどを行なっています。

閉所作業は開所の逆をやるわけですが、今年はミニ水力発電関連の作業がなかったため、11月7日、8日に宿泊者を減らし、日帰りメ

ンバーも動員して8人程度で実施しています。力作業のメインは、なんとと言っても雪囲い板の設置です。豪雪地とは言えない上高地には少々重厚過ぎると思える大きな雪囲いで地下玄関、1階玄関、バルコニー、裏手管理入室を封鎖していきます。これで冬季の暴風・防雪は完璧、そして、何より防犯抑止になっています。

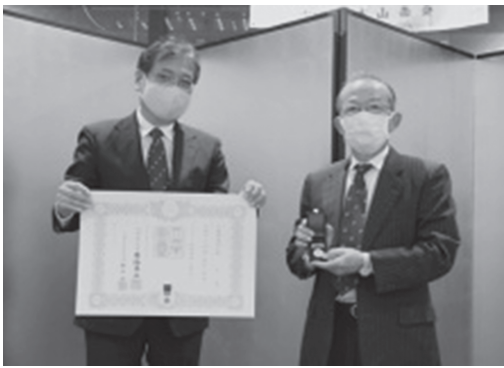
このように開所・閉所の作業は、オープン期間中に会員の皆様に快適に利用いただけるよう、山研委員会および信濃支部メンバーが労力を提供して支えています。また、現在の山研（建物としては3代目）は建築後27年が経過しており、少しずつ手を加えていくことも必要な時期を迎えているようです。加えて建物を取り囲む樹木も大きくなり、枝が屋根に掛かったり、大風による倒木被害も懸念されます。今後も山研を末永く維持していくために何をすべきなのか、しっかりと考えて実行に移すことが日本山岳会に求められているのではないかと思います。私もこの冬、妙高高原の雪にまみれながら考えてみたいと思います。

（上高地山岳研究所管理人）

REPORT

梶正彦会員に紺綬褒章が授与される

11月19日(木)、東京・丸の内の本外国特派員協会記者会見室で、梶正彦さん(日本山岳会会員、全国山の日協議会理事長)の紺綬褒章伝達式が開かれた。式には日本山岳会と全国山の日協議会の役員ら19人が参加し、永田弘太郎・常務理事の司会の下に19時に開会。冒頭に古野淳・日本山岳会会長が「公益のために多額の寄付をしてくださったことに感謝します」と謝辞を述べるとともに、推薦から授賞に至るまでの経緯を紹介し、褒章を伝達した。



紺綬褒章と褒状を持つ梶正彦会員(右)と古野淳会長

壇上に立った主賓の梶さんは「1969年に学生部の仲間4人でインド・ヒマラヤに出掛けたことが縁で、76年のナンダ・デビイ84年のカンチェンジュンガ縦走など、JACとの関わりが人生そのもののような生活を過ごしてきました。その後も新しいことへの挑戦を念頭に人生を送ってきましたが、そのための体力も忍耐力も、山登りを通して得られたものでした。ナンダ・デビイ以降、通算16年の間、日本を離れ、仕事の忙しさもありJACの活動や登山そのもの



伝達式の後、梶正彦会員を囲んで祝賀の宴が催された

からも遠ざかっていましたが、お世話になった先輩諸氏や山仲間が活動を支えているのを外から見ていただけで、後ろめたさを感じていました。多少でも感謝の念を表わすには寄付しかないだろうと考え、2018年に永年会員となった機会に実行しました。ちょうどそのタイミングでJACが褒章推薦団体になり、私が第1号となったわけですが、これには驚きでした。」と挨拶した。

続いて佐野忠則・公益法人運営委員会委員長から、紺綬褒章は特定の公益団体が行なう公益事業に一定の寄付を行なった個人および団体に授与されるもので、JACが推薦団体として認定を受けたこと、この資格は民間では日本赤十字社や、ごく一部の公益法人のみが持っていることなどの説明があった。続いてナンダ・デビイ以来のお付き合いとなる小林政志前会長による「梶さんがつくってくれたこの寄付の風土が、さらに広がってほしい……」との言葉とともに乾杯。会食と懇談に入った。

梶正彦さんは昭和22(1947)年生まれ。上智大学理工学部と経

済学部を卒業後、外資系金融機関、製造業、ITサービス会社と主に海外で活躍し、直近ではタタ・コンサルタンシー・サービスズ日本法人の社長、会長などを12年間にわたって務め、現在は全国山の日協議会の理事長にも就任している。

懇談の席でも「山の日協議会は6月に第2期執行部が発足した。これまでの4年間をベースに、本格的に国民の祝日として活動を推進していく。登山だけでなく教育、保全、アクティビティ、地方活性化など多くの分野で行政、団体、サークルなどを巻き込んで活動したい。目標達成へのルートを探し、計画を立て、体制を構築し、仲間を集め、理念を共有し、行動を起こす。これはJACや登山界の先人たちの探検的な挑戦に通じるものがあると思う」と抱負を語り、JACへの理解と協力を求めた。

式は成川隆顕・日本山岳会「山の日」事業委員会委員長の「JACがどこまでフォロー、サポートできるかもこれからの課題。前を見詰めてがんばりたい。」との締めめの挨拶で閉じられた。

(久保田賢次Ⅱ文、清水義浩Ⅱ写真)

東西南北

N

S

播隆上人槍ヶ岳初登頂日

小原茂延

僧侶播隆上人は、槍ヶ岳初登頂者として日本登山史に刻まれているが、初登頂年月日について、一つは文政9年(西暦1826年)8月、もう一つが文政11年7月20日(西暦1828年8月30日)と、二つの見解がある。

文政9年8月登頂を主張する底本資料は『開山曉播隆大和上行状略記』(通称『行状記』)で、文政11年7月20日を主張する文献は『信州鎗嶽畧縁起』で、それぞれが根拠の拠り所になっている。なぜ同じ資料の存在を知りつつ、二者が違う解釈をするのであろうか、という単純な疑問が生じるところでもある。

そもそも播隆上人は槍ヶ岳登山に関して、文政9年と11年の本人

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

直筆の、一次資料としての記述を遺さなかった。さらに『行状記』と

『信州鎗嶽畧縁起』は、博物館的には一次資料か二次資料か意見が分かれるところのようで、確定することが困難なことに拍車を掛けることにもなっている。新しい資料が今後出現する可能性は少ないであろうから、このまま二つの主張を受け入れていくしか、ないのであろうか。

とは言え、登山史的に考えて、いずれの年に登頂したか、はっきりさせることは必要かつ重要なことである。

そこで、現在残されている前述二つの資料を改めて読み直してみても、新たな見解ができるはずもないので、仮説を立てて検証してみる。

二者の見解で、共通することがある。それは、文政11年7月20日に播隆上人が槍ヶ岳に登頂した際

三尊の仏像(南無釈迦牟尼如来、南無阿弥陀如来、南無観世音菩薩)を持って登り、頂上で石の祠に安置した。ことである。異なることは、文政9年の播隆上人の登山は、頂上に登らず肩まで登っただけの槍ヶ岳試登か、頂上まで登頂したかの違いである。

そこで、この9年と11年を状況だけで考えてみることにする。

もし播隆上人が文政9年のとき、試登で槍ヶ岳肩までしか登らなかつたら、頂上の状況が不明であるから、文政11年のときは、仏像を野ざらしにはできないので、木製の祠を背負って登ったはずである。しかし、播隆上人は三尊の仏像だけを持って登頂し、頂上にある石を活用して、石の祠を造って安置した。これはどのような理由からか。導かれる状況は、播隆上人は文政9年に登頂し、頂上は岩盤や角ばった厚みのある石(立方体のような石)ではなく、手で動かすことができるような平べったい石がいくつもあり、これを使えば祠ができることを確信していたのである。そのため、文政11年7月20日、木製の祠を持ち上げず、現場で石を工面して、簡単な祠を組み立て

「東西南北」欄の原稿募集

「東西南北」欄の原稿を募集いたします。当欄は山に関わる自然地理、動・植物、登山史、岳人(登山家)伝、登山思想、民俗など、幅広い分野の調査や研究、考え方を発表するスペースです。多くの会員の皆様のお考えや、研究成果を会報編集委員会宛お寄せいただきたいと思います。原稿分量は1000文字が目安です。掲載月号については編集部にお任せください。

会報編集委員会

ることを想定して、仏像三尊しか頂上に持ち上げなかつた、と言えるのである。

今さら新たな文献が見つかることもあるまいし、この文政11年の行動こそが、文政9年に登頂していた証拠である、と言って間違いないであろう。播隆上人の槍ヶ岳初登頂は文政9年(西暦1826年)8月なのである。

播隆上人はその後、天保5年6月18日(西暦1834年7月24日)に、藁製の綱を掛けて、頂上を平らにして、木製の祠を設置して、四尊目の仏像(南無文殊師利菩薩)を安置した。

現代人の論争を尻目に当の播隆上人にとつては、いつ槍ヶ岳に初登頂したのかということは問題ではなく、頂上に祠と四尊の仏像を安置し、信者のための藁の綱（善の綱と呼ばれ、のちに鉄鎖製に掛け

替えている）を掛けることによる開闢（かいびやく）開山と同義語の方が意義のあることではないか、と播隆上人を研究している「ネットワーク播隆」代表・黒野こうき氏は語ってくれた。

支部



だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

福島支部

吾妻連峰・前川大滝沢支流、大滝深沢（仮称）の遡行



滑川大滝120m(下方)の上に見えるスラブが大滝深沢

吾妻連峰・東大巔の北東を流れる大滝沢の支流だが、久々にとっても楽しめた沢で、まさに「隠れ沢」だった。

大滝沢・滑川大滝の基部へ右手から流れ込んでいる沢が今回遡行した大滝深沢（仮称）だ。ただし、この沢には正式な名前が付いていない。そこで、遡行して名前を付けようと、仲間5名が集まったが、全員この沢は初めてだった。

過去に何パーティかは入渓していると思うが、記録や写真などは見当たらない。場所的に滑川大滝へ目が行くポイントであるため、存在は認識してもスルーされやす

い沢でもあるのだ。



大滝深沢の終盤に現われるスラブ滝100m

そして、この沢の上部には滑川大滝と比べても見劣りしないすばらしい大スラブ滝が広がっている。そのスラブまでは、兩岸50m以上のゴルジュ帯の中に10本の小難しい連瀑帯を慎重に越えて行かなければならず、ナメ滝、ヌメ滝、ハング滝、チムニー滝、ヤブ滝といろいろなタイプの滝が出現する。様々な登攀技術を駆使しながら進むと、パッと目の前が開けてきた。連瀑帯を越えたご褒美のように大スラブ滝が現われたのだ。「ウォー」と思わず全員が声を上げてしまった。なんということだろう、そこには滑川大滝がもう一つあった

寄附金および助成金などの受入報告

(令和2年10月31日まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、 その他
日向祥剛 会員	100	東九州支部 創立60周年記念事業
加藤英彦 会員	50	東九州支部 創立60周年記念事業
重廣恒夫 会員	30	東九州支部 創立60周年記念事業
木本義雄 会員	30	東九州支部 創立60周年記念事業
飯田勝之 会員	30	東九州支部 創立60周年記念事業
江藤幸夫 会員	30	東九州支部 創立60周年記念事業
甲斐良治 会員	20	東九州支部 創立60周年記念事業
藤澤容子 会員	10	東九州支部 創立60周年記念事業
浅野総一 会員	10	東九州支部 創立60周年記念事業
大園広子 様	10	東九州支部 創立60周年記念事業
少額寄附者2名	-	東九州支部 創立60周年記念事業
佐怒賀義邦 会員	30	日本山岳会運営費用
笠原正明 会員	20	永年会員からの ご寄附
匿名希望	10,000	日本山岳会運営費用
日向祥剛 会員	300	北九州支部ルームの 運営資金の一部として

のだ。落差約100m、幅60mのスラブ滝に全員感動、そして、私は今までの沢へ来なかったことを悔いたのだった。

週行Ⅱ令和2年9月20日 ルー
トⅡ滑川橋→滑川大滝→大滝深沢
→大スラブ滝登攀→1250m付
近からホラ貝沢支流→ホラ貝沢→
大滝沢出合→ネコノ沢→登山道→
滑川橋

(小柳安弘)

石川支部
不自由な中での新たな登
山形態を模索して

石川支部の令和2年度は、4月3日に定員100名の会議室に密を避け、出席者16名の総会から始まったが、その後の移動制限や各種の自粛などにより総会以降は状況を見ながら支部活動をする事とした。しかしながら状況は変わらず、月例集会の会場でもある会議室も4月以降は閉鎖、使用禁止となり、会員相互の連絡はメールなどに限定され、自粛と相まってほとんど活動が行なわれない状況となった。

支部としては本年度計画の白山親子登山教室を中止とし、また、登山道整備事業である2ルートの登山道整備事業や、今年度の当支部担当の5支部懇親山行集会は延期とした。特に5支部懇親山行は皆さんが楽しみにしている懇親山行だったが、4支部会員には申し訳なく思っている。さらに4月開催予定であった共催参加の富士写ヶ岳での久弥祭は中止となり、これにより本年度上期の支部活動はすべて中止もしくは延期となった。

ただし、会員個人の活動には自粛のお願いのみとして、制限はないので各会員の判断にて活動してもらうことになった。

その中でも、会員有志による登山道整備の草刈りはするべきとし、

10月には有志6名にて富士写ヶ岳登山道の草刈りを実施した。昨年とは反対側ルートより入山、ルートの最奥部まで行き、刈りながら再度頂上まで戻ることとした。紅葉には少し早かったが久しぶりの山に接しての作業、「苦勞様」と登山者からの声掛けも励みとなり、また、仲間と昼食の時間は格別。実施して良かったと感じる。

今後の支部活動としては、以前のような山行や集会は、大きく状況が変わらない限りは叶わないと思われる。今後は感染予防を第一に考え、新しい山行形態を模索しつつ、あえてなるべく人のいない

川井靖元写真展「岳・信仰・民」
のお知らせ

高所山岳のチョモランマやマナスル、カイラスを対象に、山と信仰、地域住民の生活を紹介します。

日時Ⅱ1月22日(金)～28日(木)

午前10時～午後7時

最終日は午後4時まで

会場Ⅱ富士フィルムフォトサロン東京(六本木)

東京都港区赤坂9-7-3

☎03-6271-3351



草刈りを実施した富士写ヶ岳の頂上にて

山や人気のあまりないルートでの計画をすることとした。

たとえば白山(2702m)などは、通常ルートは人気があり、いつも混雑しているが、北部ルートなどはほとんど人に会うこともないルートばかり。このような山やルートを探し、見付けるのも登山の楽しみとしてとらえれば、この窮屈な状況でも充分登山を楽しめると考える。

これからはワクチンの普及などで、皆がのびのびと山に接して楽しむことができる日が来ることを切に望む。

(支部長・樽矢導章)

福井支部

コロナ禍の下では森づくりに専念？

今年は例年にも増して寡雪で、スキー場ですら十分な積雪が得られず、山では夏道を行かねば谷に落ちる状態であった。そこへ新型コロナウイルス感染症が加わり、踏んだり蹴つたりの令和2年が始まった。3月中旬に東京帰りの人から始まった新型コロナウイルス感染症は飲食店や医療機関でクラスターが発生し、一時期、人口に対する感染者数が東京を超えて日本一に達した。以来、支部活動も自粛モードに入り、新年度の計画は支部総会をはじめとしてほとんどの活動が一時中止に追い込まれた。しかし、そんな中でも小規模な県内山行と森づくりは、現地集合という形で継続できた。今回は猿投や高尾には遠く及ばないが、我々のささやかな「糸生の森づくり」を報告する。

森づくりは、福井県越前町糸生地区の旧糸生中学校横、県道3号糸生中学校前交差点の北東角地、雑木林とガマの茂る池からなる約7000㎡の町有地を借り受けて行なっている。交差点の信号で停



「森づくり」のアピールが目立つ看板の前で

車すると、すぐ東側に「森づくり」「みんなの里山」「日本山岳会福井支部」と書かれた看板でアピールしている。活動は12年前の2008年10月26日、旧校舎横の草地へクリやクスギ、コナラなどの植林から始まった。落葉樹の森、山野草が豊富で池にはメダカやフナ、コイなどが生育し、水鳥が飛来するビオトープを目指している。

昨年までは月1回、4月から11月までの活動だったが、今年からは3月から月2回の予定で活動している。主な作業は、①花壇整備、交差点の歩道沿いに花壇を設置、季節の花を植え、さらに町道横に花の種(コスモス)を蒔き、ヒガン

バナの球根を植えている ②草刈り、遊歩道や花壇周囲、植林地や町道横の斜面の雑草を刈って周囲の環境に配慮している ③遊歩道整備、歩道の造成、補修、丸木橋の架橋など安全な散策コース整備を目指す ④樹木の植林と伐採・松の枯れ木の伐採や密集した雑木の間伐、クリやナラなどの植林を実施している。最初に植えたクリやコナラは5mほどに成長し実を付けている ⑤池の整備…池には絶滅危惧種のメダカやコイなど多くの魚が生育している。池のガマを一部撤去し、狭くなった湖面を広げ、水鳥の飛来する池を目指す

⑥シイタケの原木作り(伐採樹木の活用) ⑦休息所を兼ねた作業小屋作り(予定)と多岐にわたる。

今年は恒例の泰澄祭が中止となり、余った予算で中古の草刈り機を3台購入し支部の備品とした。糸生の森にはシユンラン、キンランなど野草も多い。来年度の目標としては、近くの植物園「プラントピア」に協力をお願いし、遊歩道周囲の植物に名札を付けて、植物観察のできる森にしたいと考えている。

(支部長・森田信人)

続 藪岩魂

打田鏝一著



2020年9月
山と溪谷社
A5変形判 224ページ
定価2200円+税

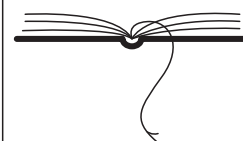
この本に「寂名山を求めて」という前書きがある。「寂名山」は造語だそう。

最初はこの言葉を本の題名にしたかったようだが、「寂」では本が売れないからと却下されたそう。

しかし、寂と名山には著者ならではの、こだわりがあるようだ。ただ静かな山であれば良いという訳ではなさそう。この本に選ばれた山を見ると、それが分かる。

先日、この本に紹介されている西上州の鹿岳^{かたけ}に行ってきた。下仁田の町に入ると、真っ先に目に入るフタコブラクダのような山だ。

図書紹介



大地から突き出た岩峰の一ノ岳、二ノ岳どちらも山頂に達するには少しはらはら、どきどきの箇所がある。しかし、ハシゴや鎖が整備されていて、私でも山頂に達することができた。山頂からの展望はすばらしい。

こんなにすばらしい山なのに、だれ一人会うことなく静かな山歩きができた。秋晴れの日だったので、山から降りてきて紅葉の始まった麓の山村から見上げる鹿岳はとても美しく、確かに名山だと思った。

前著の『藪岩魂』には、よく事故が起きる妙義山のコースも紹介されている。前著から7年経ち、体力的にも衰えが出てきても、単なる静かな山歩きではなく、雄大な展望を楽しめたり、達成感が味わえる山がこの本には紹介されている。

サブタイトルに前著と同じく

「ハイグレード・ハイキング」とあるが、読図が必要であつたりするなど、一般的なハイキングとはひと味違うガイドなのだ。

著者と何回か山歩きを一緒にさせてもらったことがある。彼は首から重い一眼レフのカメラをぶら下げ、手には小さなメモ帳を持って山歩きをされる。実にこまめにメモをする。

500mほどの低山を歩くときでさえ、小屋泊まりでもしそうな荷物を持つて持参されているようだ。ほかにもガイドとしての経験から、もしもの場合に対応できる用意をされているのだろう。

そうした用心深い著者の登山ガイドだから、添付されている地図にも細かい書き込みがある。

前著では手書きの地図だったが、今回はデジタルの地図になっている。ぎりぎりまで最新の情報を地図に書き込むにはこの方が良かったようだ。著者は西上州の山が得意なようだが、この本には、関東から東北まで紹介されている。

私の知らない山がたくさんある。この本を読むと、それらの山へ行ってみたいくなり、人にあまり知

図書受入報告(2020年11月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
高澤光雄	エッセー集 山旅句	232p/19cm	北海道出版企画センター	2020	著者寄贈
松岡憲知 他(編)	山岳科学 : Mountain Science	120p/26cm	古今書院	2020	編者寄贈
安岡繁樹	南島探検 : 西表島の沢を歩きつくす	342p/21cm	あっぷる出版社	2020	著者寄贈
会津山岳会(編)	すかり 小谷部明追悼号 (1995年12月~2019年2月)	242p/26cm	会津山岳会	2020	発行者寄贈
会津山岳会(編)	スピティの空に浮かぶ月 : チャウ・チャウ・カンニルダ峰 2019	73p/30cm	会津山岳会	2020	発行者寄贈
串田孫一	山の独奏曲 画文集 (ヤマケイ文庫)	199p/15cm	山と溪谷社	2020	出版社寄贈
山と溪谷編集部(編)	ソロ登山の知恵 : 実践者たちの思考と技術 (ヤマケイ新書)	142p/18cm	山と溪谷社	2020	出版社寄贈
辰野勇	自然に生きる力 : 24時間の自然を満喫する	223p/19cm	KADOKAWA	2020	著者寄贈
浅井紀子	道しるべに会いに行く : 丹沢・不老山周辺の岩田潤泉さんの道標	139p/18cm	風人社	2020	著者寄贈
石濱裕美子・ 和田大知(編)	大隈重信とチベット・モンゴル : 早稲田大学中央ユーラシア歴史・文化研究所 企画展 図録	40p/30cm	早大中央ユーラシア歴史・文化研究所	2020	会員寄贈

られていなくても「寂名山だ！」と感動できる山なのだと思う。

たくさんの人に知られず、「寂名山」のままでいて欲しいと私は思うが、それでもこの本をお勧めしたい。

(北島洋二)

東九州支部が『新・大分百山』を発行



『新・大分百山』書影

東九州支部編集・発行の登山ガイドブック『大分百山』は、1991年に支部創立30周年記念事業として出版し、2002年に支部創立40周年記念事業として改訂版を発行して18年を経ている。このため、このたび支部創立60周年を記念して三訂版を発行した。

改訂版の発行以降、登山道や山の環境の変化などがあつたため百山選定の見直しも行ない、6つの山を入れ替えている。A5判で、初版や改訂版に比較して写真を増やし、地図も大きく見やすくして、その分説明文は簡略にして、紙面は

オールカラーで見やすく読みやすく仕上がつている。書名も『新・大分百山』と改題しての出版で、一般

書店での販売も定価2200円(税別)で開始している。

(飯田勝之)



令和2年度第7回(11月度)理事会議事録

日時 令和2年11月11日(水) 19時

00分～21時30分

場所 集会室およびオンライン

(zoom)

【出席者】古野会長、山本(21時10分

から出席)・野澤各副会長、

永田・萩原・古川各常務理

事、安井・清登・清水・飯

田・近藤・柏各理事、黒川・

石川各監事

【欠席者】坂井副会長

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・寄附受入の承認について

10月29日付けの寄附1件(100万円)について寄附受入およ

び管理規程第3条2に基づいて審議した。(賛成11名、反対なしで承認)

2・名誉会員の推薦について
候補者推薦が1名あつたが、本年度については該当者なしとした。(賛成10名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・登山保険の改善および新設の報告(古川)
現状の登山保険の改善および新設についての進捗状況の報告があり、協議した。

2・支部連絡会議について(永田)
支部連絡会議について、オンラインを活用し、年2回から3回に増やすことを協議した。

3・広報委員会の設置(永田)

広報委員会の設置と内容などについて協議した。

4・山の天気ライブ授業への協賛について(飯田)
山の天気ライブ授業への協賛提案について協議した。

5・支部活性化と国土地理院について(安井、永田)
支部活性化のために国土地理院WGが連携できないか協議した。

【報告事項】
1・入会希望者7名、準会員入会希望者2名について入会承認を行なったとの報告があつた。(古野)

2・審議事項において承認された1件を含む寄附金15件の受領について報告があつた。(古川)

3・コロナ対応に関して会報1月号に記事を掲載する旨の報告があつた。(古野)

4・名誉会員の審査方法などを、公益法人委員会で検討する旨の報告があつた。(古野)

5・本年度の上高地山岳研究所の利用状況などについて報告があつた。(安井)

6・会員名簿の申込みハガキが1700通を越え、会員名簿を発行するとの報告があつた。(永田)

エベレスト日本人初登頂50周年記念 「写真で振り返る日本人のエベレスト」展



上空から見たエベレスト 大森弘一郎撮影

1970年5月11日、日本山岳会隊の松浦輝夫と植村直己は、日本人として初めてエベレストの登頂に成功した。その登頂50周年を記念して、初登頂から女性初登頂、日本人初の無酸素登頂、そして、最近の公募登山隊の過密登山まで、約40点のカラー写真を展示する。

期 間＝12月12日(土)～2021年1月11日(月)10時～18時

休館日＝月曜日、年末年始 入館料＝無料

場 所＝東京板橋区・植村冒険館

問合せ先＝☎03-3969-7421

創立120周年記念事業委員会

4日 常務理事会 山行委員会

ルーム目誌 11月

7・紺綬褒章伝達式を行なうことについて報告があった。(永田)
8・今冬から雪山天気予報の配信を再開するとの報告があった。(古野)
9・会報「山」11月号の発行について報告があった。(節田)

16日	14日	13日	12日	11日	10日	9日	6日
会	総務委員会	図書委員会	YOUTH CLUB 五会	理事会 休山会 山想倶楽部	山岳研究所運営委員会 オトクラブ	スキークラブ	スケッチクラブ 土曜会
	資料映像委員	スケッチクラブ					

会員異動

17日	18日	20日	24日	25日	26日	30日
バックカントリークラブ	つくも会 三水会 スキークラブ	アルピニズムクラブ	平日クラブ	山岳古道調査プロジェクト	山遊会	資料映像委員会 青年部
						11月来室者 204名

荒木吉栄(8247) 20・11・14
鮎川 湜(11004) 20・11・11
中藪淳一(12760) 20・5・17
伊東 亨(14182) 20・7・14
退会
成田幸雄(9382) 青森
早川 博(15578) 東海
酒井邦博(16004) 信濃
内村直子(A0039)

訂正

「会報」2020年11月号(906号)の12ページ下段、「新入会員」の表中「鷲智恵子」様の「恵」は「惠」の誤りでした。訂正するとともに、お詫び申し上げます。

(会報編集委員会)

日本山岳会会報 山 907号

2020年(令和2年)12月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社

◆編集後記◆

●11月は中伊豆の登り尾と、東海道・由比宿の背後にそびえる浜石岳を再訪しました。浜石岳は、私が編集を担当した『子連れ山旅日記』(石川貞昭著、1980年)という本で、初めてその存在を知りました。石川さんは学習院大学山岳部のOBで、文章だけでなくスケッチも嗜む多才な人でした。●「夕暮れまでには一時間以上あるが、大きな鈍い太陽の光の下に、清水港が飛行機の上からながめたように広がりを見せている」と石川さんは山頂の印象を綴っていますが、刊行の5年後の85年8月12日、そう、あの日航機墜落事故により御巣鷹山で亡くなっています。そんな因縁があるだけに、薩埵峠からの絶景とともに、忘れられない山になっています。(節田重節)